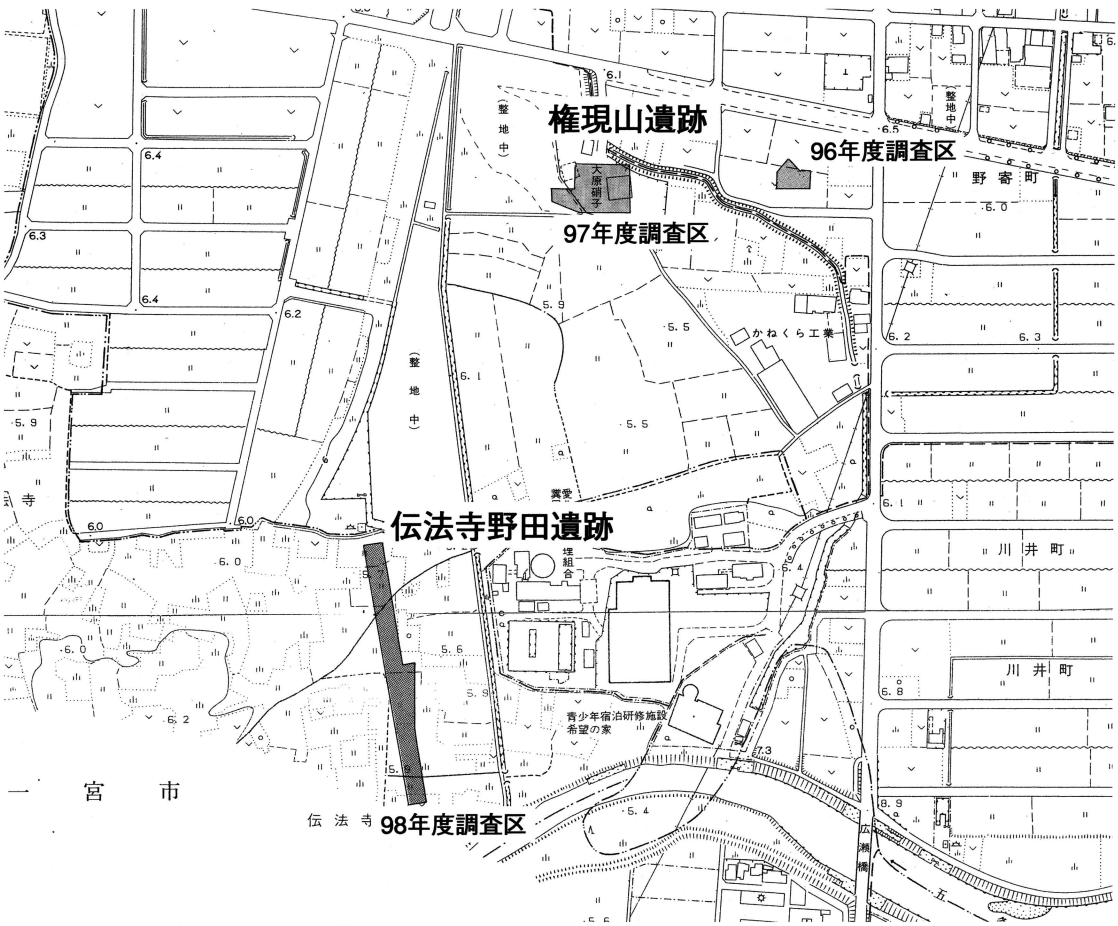
伝法寺野田遺跡（でんぽうじのだ）

調査の経過　伝法寺野田遺跡は一宮市の南東端、丹陽町伝法寺地内に所在し、五条川がそのなかほどで大きく蛇行する地点の右岸域に立地する。遺跡の周囲一帯は、縄文時代から弥生時代にかけての遺跡が高い密度で分布する地域として従来から注目されており、本遺跡にも元屋敷遺跡、岩倉市権現山遺跡、岩倉市北島白山遺跡などの遺跡が近接して存在する。発掘調査は五条川右岸流域下水道建設に伴うもので、平成８・９年度の権現山遺跡の調査に引き続いて、今年度は2,400㎡の調査を４月から９月にかけて実施した。

遺跡の概要　今年度に実施した調査の結果、本遺跡が弥生時代から、古墳時代、古代・中世にわたる複合遺跡であることが明らかとなった。なかでも注目すべき成果として、弥生時代中期中葉と考えられる水田を検出したことが挙げられる。これまで県下では、最も時期が遡る水田として一宮市大毛池田遺跡において調査された古墳時代初頭の水田が知られていたが、弥生時代水田の検出は初めてとなる。水稲耕作を実証するうえでの不動産的な証拠となる水田跡が調査されたことにより、当地域の弥生時代における生業の一端が今後明らかにされるものと思われる。



第１図　調査区位置図（１：5,000）

弥生時代中期　弥生時代中期には、東から延びる微高地が調査区のほぼ中央にあたっていることが確認でき、微高地の周囲は緩やかに傾斜する。水田はこの微高地南縁の緩傾斜地を利用して営まれている。また、微高地の北西を幅５～７ｍ、深さ約1.8ｍの小河川が大きく蛇行しながら南流している。

水田を平面的に検出したのは、Ⅶ層・黒褐色粘土層の上面である。Ⅶ層は弥生時代中期中葉の遺物包含層でもある。水田域では、Ⅶ層と上位のⅤ層・暗褐色粘土層の間層としてⅥ層・灰黄色シルト層が存在し、水田面を被覆する。Ⅴ層もⅦ層と同様に、弥生時代中期中葉の遺物包含層となっており、水田の年代を弥生時代中期中葉と推定する拠り所となっている。さらにⅤ層は古墳時代前期に、洪水性の堆積（Ⅳ層・灰黄色細粒砂層）によって覆われる。

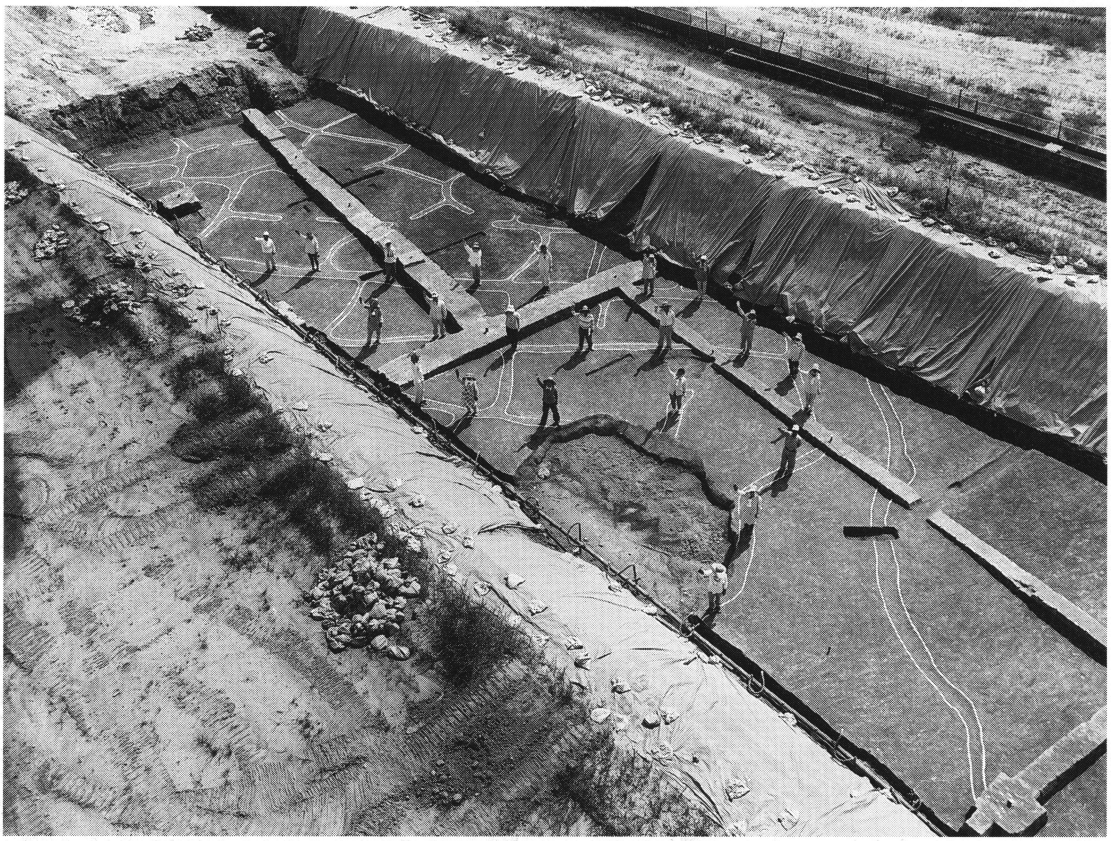
水田区画は、まず北西～南東方向の大畦畔が基軸として設定され、それと平行、あるいは直交する方向に小畦畔を配することによって、典型的なところで長軸が約８ｍ、短軸が約３ｍの小区画を形成するものである。大畦畔の上端幅は約80㎝、下端幅は約120㎝、高さ約10㎝を測り、小畦畔は幅約20㎝、高さは２～３㎝を測る。水田への水配りは、田面の高低差を利用するいわゆる「田越し灌漑」によっていたものと推定される。さらに、北西～南東方向の畔と平行して微高地の最高所と微高地の縁辺に掘削された溝（溝１・溝２）は用水路として機能していた可能性も考えられる。また、水田面の精査によって、稲株痕とみられる径約１０㎝の小穴や、耕具痕とみられる半月形、長楕円形を呈する小土坑が確認された。一方、足跡は確認されなかった。

Ⅴ・Ⅶ層の遺物には、弥生時代中期中葉に属する弥生土器の甕、壷などがあり、微高地を中心にして出土した。小河川からも同時期の土器が古墳時代の土器と混在して出土している。他の出土遺物には石鏃等の石器があるが、収穫具等の出土はみられなかった。なお、特筆すべき遺物として、大畦畔の脇から出土した無茎銅鏃がある。

古墳時代　古墳時代前期には洪水によって小河川が一気に埋没し、弥生時代には起伏があった地形もかなり平坦となる。当該期の遺構はほとんど確認されないが、小河川や包含層中からは、土師器の台付甕や高杯などが出土している。

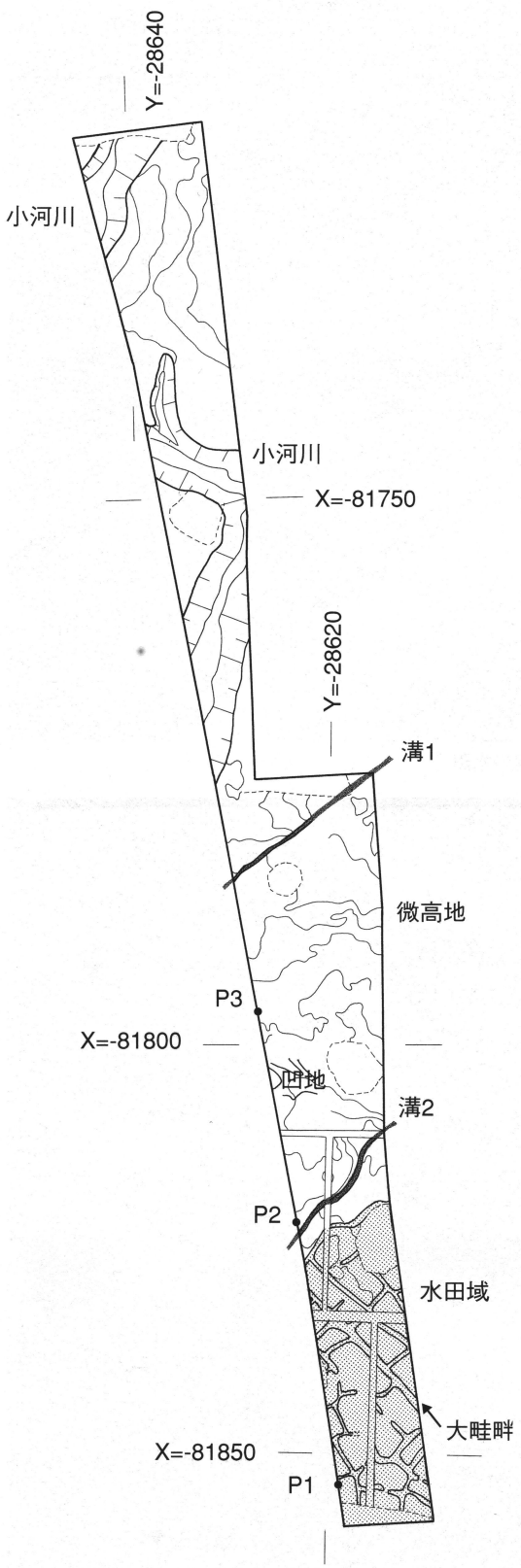
古代・中世　古代・中世にはそれぞれ溝と土坑がわずかに確認できるにすぎず、これらの遺構から須恵器の杯・鉢、灰釉陶器椀、灰釉系陶器椀などの遺物が少量出土した。

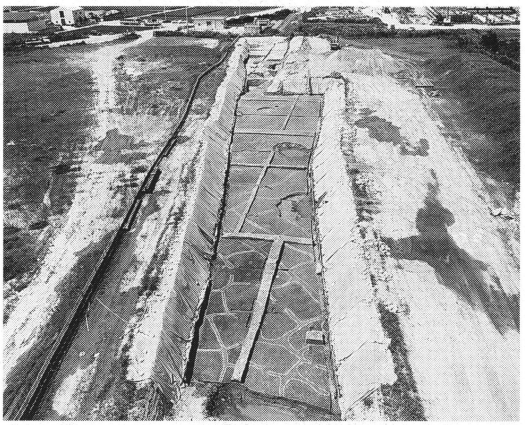
まとめ　弥生時代の水田を周囲の微高地、小河川と一体として捉えることができた点は、生産域をも含めた当時の集落景観を復原するうえで、非常に有意義な成果である。さらに、遺跡の形成過程が明らかとなれば、遺跡の周囲に存在する一連の弥生時代集落の動向と比較することによって、後背湿地において可耕地が獲得されていく過程を、自然環境の変化と対応させながら具体的に描くことも可能となろう。また、水田面で確認された稲株痕や耕具痕は、弥生時代の農業技術体系を推し量るうえで大いに参考となるが、それだけに慎重な扱いが求められる。今後、自然科学分析の成果も十分に活用しながら、これらの課題に取り組むこととしたい。　（早野浩二）

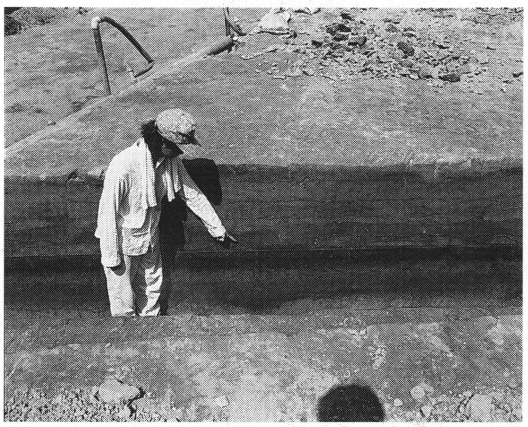


弥生時代中期の水田

小河川




調査区全景


大畦畔の断面

小河川の断面

第２図　弥生時代中期の遺構配置図（１：800）